

令和5年度 “信州の木”建築賞 審査委員会講評

木造化、木質化のお手本となる建築物を選定する“信州の木”建築賞は、平成28年度に創設して以来、今年で8回目となり、長野県内で木造建築に携わる者にとって栄誉あるものとして定着してきた。

本年度は、「信州の恵まれた自然環境を活かし、省エネに配慮した木造住宅」をテーマとした。応募された作品は、どの作品もそれぞれの特徴があり、非常にレベルの高いものばかりであった。

今回の主な評価の視点としては、

- ・地域の事業者や技能者が主体となり、木材の建築技術の継承や木造建築等の発展につながるもの。
- ・木材の調達の手間や木材利用の仕掛けなど、林業、木材振興に寄与しているもの。
- ・県産木材の利用について、主要構造部や内装材に限らず、木質系建材や建具、家具などにも取り入れ、全体の調和がとれたもの。
- ・デザインに優れ、地域の文化や気候風土、まちなみや周辺の景観と調和した、信州らしいもの。
- ・環境負荷の低減に配慮し、省エネルギー化への取組や提案がなされているもの。

以上の5点である。

一次審査では、まず、応募資料をもとに1作品ずつ審査委員が講評し、意見を交換した。審査委員は意匠、構造、環境設備、材料など様々な職種、専門分野から構成されている。そこで、それぞれの専門分野の視点から作品を評価し、その情報を審査委員全員で共有した。どれも二次審査へ進んでも申し分ない作品であったため、これらの意見交換の後に投票を実施し、投票結果もとに5作品が二次審査の対象となった。

二次審査は、現地審査を行った。実際に作品を見ながら、応募者へのヒアリングを行い、その後、一次審査と同様に審査委員で意見交換し、二次審査へ進んだ5作品のレベルが拮抗していたことから最優秀賞に該当する作品はなしとし、優秀賞を選考する投票を行った。投票結果をもとに優秀賞2点を選定した。

優秀賞の一つ目は「北アルプスと暮らす家」に、二つ目は「信州焼杉の家」に決定した。

一つ目の優秀作品である「北アルプスと暮らす家」は、開口部を大きく取りながらもUA値を基準値内に収め、家の中からも雄大な北アルプスを眺望できる環境は、二拠点生活する施主にとって素晴らしいものとなっている。また、県産材の立派な柱や梁を見せるための大工の技や、土壁風の外壁や漆喰塗りの内装に左官の技が存分に生かされるとともに、ウッドショックの状況下でも日頃からの県産材普及の取組から、供給側との信頼関係が築けていたことで、適正な価格での調達が可能であった。意匠面・構造面に加え、技能面・木材の調

達面でも評価された。

二つ目の優秀作品である「信州焼杉の家」は、景観に非常に馴染んでおり、杉・浅間石・鉄平石などの地元の材を使った、地元の職人による地産地消の家である。景観と方位とがバランスよく考えられており、北側に浅間山と樹木がきれいに見える開口を配置して眺望を優先し、南側には小さな窓しか設けず、収納スペースとする大胆で見事な計画であった。外壁の信州焼杉張りについては、県内産地別、材種別の木材特性、流通や供給等のヒアリングを行い、木材の性能と地域経済循環の面から県産木材の利用を決めている。また、地元製材業者の製材工場での加工技術の把握、コスト面からの施主の焼杉 DIY に最適な方法等も考慮し、外壁張板サイズや張り方がデザインされていることが評価された。地元の職人の手作り感が良く出ており、焼杉の経年変化がどうなるか楽しみであるといった意見もあった。

当建築賞は、「お手本」となる優れた建築物を表彰することで、技術者・技能者のスキルアップを図るとともに、広く県民の皆様はその魅力を発信することである。今回の対象は、信州の恵まれた自然環境を活かし、信州健康ゼロエネ住宅指針の最低基準に適合する住宅であるが、県産材を活用し、美しい景観を生かしつつ性能が優れたものとするこゝで、まさしく技術者・技能者のお手本となるような作品が選ばれる結果となった。

先進的な建築物は今後、木材の利用、木造建築物の普及や 2050 ゼロカーボンの実現を図っていくうえで、広く周知が望まれるものであり、当建築賞の趣旨にも合致するものと思われる。

建築物の使い手・住まい手と、木材関係者や施工関係者などのつくり手などにより、地域内での景観を生かしながら優れた性能を持つ建築空間を創出するため、当建築賞を通じ、継続した普及啓発を期待したい。

結びに、日常業務でお忙しい中、応募資料の作成や現地でご説明いただいた応募関係者の皆様に感謝を申し上げます。

令和5年11月21日

令和5年度“信州の木”建築賞

審査委員長

京都大学生存圏研究所 教授 五十田 博